

Untitled

[物語に記号はいらないというただの言い訳]

七浦彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Untitled
「物語に記号はいらないというただの言い訳」

【Nコード】

N5193A

【作者名】

七浦彩

【あらすじ】

風変わりな男の元に孤児院から少女がやってきた。

A Alice

「今現在自分の置かれた状況を把握できる力」

はじめましてこんにちは。男は少女に向けて笑いかけた。どこかひよろりと頼りなく、そのくせ存在感だけはたつぷりとあるような例えるならば冬の向日葵を思わせる風貌であった。

少女ははじめまして、と返して、男を見つめた。そして、どうしても気になったことを、問う。

いくら出したんですか。

人が人を貰い受ける時、特に自分のような子供が人から人に渡るとき、いくらかの 決して少ない額ではない 金が動いているということくらいは、少女も知っていた。そうして、大抵貰われていく子供たちはこざっぱりとした服を着た、相応の年を取った人間の手を引かれてどこかに去っていったことも。

さてね。無邪気さを残した顔で男が笑う。

君はいくらだと思っ？

少女はしばらく考えて、小首を傾げる仕草をした。邪魔もの、厄介もの扱いを受けないための愛らしさはそれでも残っていたのだった。少女はさらに考えて、それから、腕を大きく広げて、振り回した。

これくらいの、クマさんと同じくらい、かな。

男は顔をくしゃくしゃにした。君がそう思うならその通りだよ。

少女に足りなかったのは、金銭感覚。

B Bed

「眠る場所 営む場所 あたため合う場所」

男の家に着いたのは夜が更けてからのことだった。森の中にひっそりと隠れるように存在するその家は夜の闇の中では全容がさっぱりとわからなかった。

最初に少女が通されたのは、大きなベッドのある寝室だった。男が二人、いや四人くらい寝そべっても大丈夫だろう、と思われるような。

僕はね、と男は言う。悪い夢を見た後に、目覚めてもまた真っ暗ってというのが大嫌いだったんだ。だから君みたいないい子が来てくれたなら、きつと独りにはさせないと、そう決めていたんだけど。

男が言葉を切ると、小さく、間が空く。

……でも君が嫌なら強制はしないよ。だから今日はここでどうぞおやすみ。僕はここにいるからね。何かあったら起こすんだよ。

男は言うだけ言うと、やけに凝った意匠の、固くて小さなソファに横になった。そうしてすぐさまうすうすと寝息を立て始める。

少女は落ちつかないにもぞもぞとベッドの中で何度か寝返りを繰り返した。こんなに柔らかくて、こんなに冷え切った布団は初めてだったのだ。

床に転がされて眠った時でも、誰かしらが隣にいてくれて、人肌であたためてもらって、それで、眠れた。

自分は幸福になったのだろうか、それとも不幸になったのだろうか。少女はそれを繰り返し考えているうちに、いつしか眠りこんでしまった。

C h o c o l a t e

「世界一脆くて扱いづらいお菓子」

放り込まれた茶色のかたまりは、口の中でとろりととろけた。悪いことをした時のおしおき。どうにも自分はこの甘さと、それから

すぐに融けてなくなってしまう感触が苦手だ。

手に持てばべとべとと不愉快だし。どうして友人たちは嬉しそうに食べているのかわからなかった。

そんなに食べ過ぎて、自分がチョコレートになっちゃっても知らないよっ

冗談で口にした言葉のつもりだった。だが「それ」は微笑む友人たちの目の前で大きく膨れ上がり、自分の飲み込んで、包み込んで息ができなくなる。

D - D e l i c a t e

「特に気をつけるべきは年頃の女の子」

男は少女の小さな手が自分の体を揺り動かしているのに気付き、目を覚ました。恥ずかしそうに、涙の線をこしこしと拭っている。

どんな夢を見たの。それは優しさからではなく、好奇心から来た質問だった。彼女が恐れることはなんだろう。それをまずなにより先に知る必要がある気がした。

少女はためらって、消え入りそうな声で答える。

……チョコレートがおそってきたの。

チョコレート。

興味深い、と思いながら男はまだ震えている少女の頭を撫でる。

おやつはチョコレートの入っていないものを慎重に選ばなくては。

笑わないのね、と尋ねて来た少女は、不思議そうな顔をしている。笑わないさ。面白いとは思うけれど。

少女は少し不満げな表情になって、ベッドに引き返した。面白い、という言葉は間違いだったろうか。慰める意味で、子守唄を歌って一緒に眠ってあげようか、と言うと、お断り、という答えが返ってきた。

君は賢明だね。男は口の中で呟いた。

E a s e

「見つけるのは難しく、保持するのも難しい」

少女が再び目を覚ますと、コーンスープの匂いが何処かしらから漏れていた。

朝日に照らされた寝室は、よく見ればあまり綺麗とは言えなかった。本当に寝室であるだけ。ベッドだけが綺麗にメイクされてあって、後は何がしかの器材が転がっている。よくもまああの闇の中足をひっかけなかったことだ、と少女は思った。

そういえば、男と会ったのは夕刻で、それからずっと何も食べていなかった。

少女は足を精一杯に伸ばして、靴を履くと昨日から着たままの服を脱いで、別れの際に皆からもらった服に着替えた。白いワンピースだった。とときの素材を使っているであろうことが手触りからわかった。

初めて触れた感触はどうとも言えず、困惑した。鼻をくすぐる新しい布の匂いも何かが違う気がした。

靴とも合っていないし。そもそもこれでは走り回れない気がする。

少女がこれを脱ぐかどうか思案する間に、朝食の準備が出来たと男が扉を開けた。そうしてそのワンピースを着た少女に目を止め、柔らかに微笑む。

似合っているよ。

本当？

少女はうきうきと裾を翻し、くるくると舞う布の感触を楽しんだ。なんだか足取りが軽い気がした。

その綺麗な服に見合うだけのフルコースを作ってあげられればいいんだけど。

男の呟きには答えず、少女は自分の一挙手一動足に合わせて体に

ゆつくりと馴染んでいくワンピースに、喜びを感じた。

F First

「肝心ではあるが意外と忘れがち」

食卓に着くと、手際よく男が湯気の立つ食事を少女と自分との目の前に置いた。そこにあるテーブルや椅子はベッドやソファと同じように意匠だけ凝りに凝っていて、よく磨かれていて美しくはあった。

ただそれが本当に「生活」というものに結びつかない。よく見に行った異国館のようだと少女は言った。異国の家がそっくりそのまま残されていて、調度品などには手を触れないで下さい、と書かれているような。そうして残されている、機能を忘れた家。言われて男は目を細めて辺りを見渡す。

使うことなんか考えてなかったからね。みんな一目惚れ。欲しいものを選んだらこうなった。

男は事も無げにさりとらった。

ああ、なんか……そういうこと、しそうだな。コーンスープをぐるぐるとかき混ぜ、少女は思った。コーンスープに映る自分の顔が、くにやりくにやりとスプーンに翻弄されている。

もちろん、

少女は男にみなまで言わず、固いパンを口に押し込んだ。

おかしい男だという最初の印象はいまだ変わらなかったが、それでも男に好感を抱き始めている自分に、少女は気付いていた。

G Gaze

「時々それは凶器にもなり得る」

それからずっと、簡素な朝食を摂る間、二人はどちらからも一言も発しようとはしなかった。

男はそれが癖なのか、あまり咀嚼をせず無理やり流し込むように食物を飲み込んだ。飲み込む前に三十回嚙みなさい、が身に染みている少女にはそれがあまり好ましいことではなかった。

少女は背筋をきちんと伸ばして、これこそ理想の食事像だ、と言わんばかりに、精一杯幼いながらも徹底したテーブルマナーを披露してみせた。男は感心したようにそれを眺めていた。

男の持ったフォークが大皿に盛り付けられたサラダの中の特に赤々としたトマトにぶすりと刺さって、少女の手が取り皿に伸びて、取り分けずにそのまま口へ、ゆで卵一つスライスオニオンの切れ端一つ見逃さないように丁寧なドレッシングをかけて。

パンをそのまま齧る。手で小さく千切ってジャムが垂れないように注意する。

コップに注がれた牛乳を飲むのにはさすがにマナーも何もなく、二人とも同時に飲み干して、ぶは、と息をついた。

……いい加減、観察のし合いはやめようじゃないか。

ぐったりとした表情で男が告げた時には、少女ももう疲労困憊といった具合になっていた。

そうして朝食は片付けられていった。

H a b i t

「自分ではないつもりでも他人から見れば」

退屈しのぎに広い館を歩きまわるうちに、少女は男の選んだものはほとんどが使用目的ではなく、眺めて堪能するための物のような壊れやすそうな細工がしてあることに気付いた。

あやふやな物が好きなのかもしれない。少女はきつと熱い料理など乗せられないだろう薄いガラスで作られた皿を眺めて思う。

男は少女が目を止めるもの、手に触れるもの、特に興味深げに眺

めていたものに目を走らせた。

一見様々なものをゆつくり觀賞しているように見えるが、少女が手に取るものは大抵あまり装飾のない、それでいて古びたもの、一昔前のデザインのものが多いように思えた。

シンプルなもの好まれた時代だったな。申し訳程度のワンポイントが刻まれたものとか。一昔前の流行を思い出し、男はまた少女の挙動に目をやった。

二人とも、互いのことを少しづつ知りはじめてはいたが、自分のことに関してはことに無知であった。

そうしてそれを相手に指摘されるまで、ほとんど気付かずにお互いを知る前に自分から、ね。

少女の悟ったような物言いに、男は軽く吹き出した。

I Interest

「引かれるのが最初。惹かれたらおしまい」

そういえば、この男はどうやってこれだけのものを手に入れられるほどの財を得たのだろう。

ふと、少女は真っ先に思い浮かべるべきだったことを考えた。

風貌はどこかしら世捨て人のようだ。自分の身なりというものに気を使っていないように見える。しかしこれだけの調度品の選びよう。もしかして自分が知らないだけで、彼は名のある芸術家か何かではないだろうか。天才ほど変人が多いというし。

けれど、そうだ、例えばこんなこともあるかもしれない。これらはみな彼の両親が遺したお金で買ったもので、寂しさを紛らわすためにたくさんのお金を使って、それで、とか。少し前に読んだ話だ。少女の想像はどんどんと飛躍していき、ついにはじわりと涙を浮かべるに至った。男は、家を散策していた少女がいきなり泣き出したことにぎょつとした。

どうして泣いているの。男が必死になって訊ねても、少女はうつむいて口を閉ざしたままだった。少女自身、なんで泣き出したのかさっぱりわからなかったからだ。

J J o k e

「時と場所と相手は細心の注意を払って選ぶこと」

チョコレート夢でも思い出した？

少女は首を横に振った。

ここにいるのが嫌になった。

また横。

ホームシックだ。そうだろう？

横。

こういう時の子供とは面白いもので いや、本人は必死なのだから面白がってはいけないのだろうけれど 慰めようと必死になればなるほど、激しく泣き出すものだ。男はそれを知っていた。

気を紛らわせなくちゃ。

すっかり弱りきった男は、ひよいとしやがみこむとその細い指で少女の脇腹をこちょこちょとくすぐった。

少女は泣き止んだが、ひどく不機嫌になったことは言うまでもない。

男は子供の泣きやませ方は知らなかった。

K K n o w l e d g e

「しかしそれが役に立つかどうかは別問題」

まったく、子供、しかも女の子は厄介だ。少女に思い切り殴られた頭を擦りながら、自室に引き返した。こういう時は放っておくほ

うがいい、と、思った。

少女は寢室に引き籠もって、布団をかぶり男に対して無視を決め込んだ。ああなってしまつては、どうしようもない。

男は机に腰掛けると、少女が来ると決まつた時に買って、少女を迎えに行く際に放り出したままになつていた本を開いた。

どこまで読んだのだったか。挟んでいたはずの琴が何故か床に落ちていたのでさっぱりと思い出せない。

ぱらぱらとめくる内、内容が思い出されてきた。

ありふれた陳腐な恋愛小説だった。本の装丁に惹かれて購入した方がいいが、どうにも台詞回しやら文体やらが臭すぎて斜め読みをしていた。

少女のお腹が空いて、昼食の時間になるまでには、いい時間潰しになるだろう。男はぱらりと頁をめくる。

どうかわたくしの愛だけを見てくださいましわたくしにはなにも必要ありませんあなたさまがいてくれればもうなにも恐れるものなどないのですわおおよくぞ言ってくれたならばわたしは全てを投げ打ってそなたとともにいこうなにもいらないそなたさえいればそなたさえ。

そういえば と、男は本を閉じて、また違う本を手にとった。今さつき読んでいた本よりは遙かにマシではあるが、やはり装丁に惹かれたために内容には満足できていない、冒険小説。

最後のシーン、異界に投げ出された主人公が壮絶な冒険を繰り返して、ようやく元の世界に戻ることでできる場面。その物語の主人公は目に涙をたた湛えて叫ぶ。

ぼくはこの記憶があれば、何があるうともきつとこれからも生きていけるよ。さよならぼくの大切な、たった一握りの、仲間たち。君たちさえ元気なら、ぼくは。

そうして主人公は全てを伝えられないまま冒険を終える。そういう物語。

何かを思いついたかのように、男は本を置いて寢室に向かった。

もぞ、と布団の中で少女が身をよじった。

僕には君が必要だ。君さえ笑っていてくれたなら何もいらないよ。思いつきで試した言葉は宙に浮いて、男はたった今言った言葉を消す方法はないのかと案じた。

枕が顔に飛んできた。ばふんと鼻に直撃したそれを拾い上げて、少女の方を見ると、布団が細かく揺れているのが見えた。そうして、少女の笑い声が漏れてき始めたのを聞いた。

不機嫌を直す方法はわかったが、二度とやりたくはないな、と男は思った。

L L a z y

「必要な行為であり自然な状態」

先ほどの発言で落ち込んだのだろうか、男がぼったりと自室に入ってしまった出てこなくなったので少女は少しやり過ぎただろうか不安になった。

そつと男の部屋に入ると、他の部屋よりも埃臭く、装丁だけ選んだのであろう本の山が積み上げられていた。

男は机につつぶしていた。椅子の近くに、見覚えのある恋愛小説があるのを見て、少女は小さく笑った。

ぶすつとした顔が少女に向けられた。

なんだい。またチヨコレートかい。

チヨコのことはもう言いつこなしょ。それよりわたし、昼寝がしたいのだけれど。あなたと一緒に。

思いつきで言った言葉に、男はあまり興味のなさそうな顔をした。どこでどんな風に？

ああ、ここに来る前にソファだらけの部屋を見つけたの。あれを二つ、どれか持って行って、外でひなたぼっこしながら眠りましょ。うよ。幸い今日はよく晴れているわ。

面倒くさいよ。

少女はとっておきの笑顔を見せた。

本気でお仕事をした後のお昼寝って格別なのよ。知らないの？
それにたまには虫干しをしてあげましようよ。ゆっくりでいいわ。
そうね、そうしてクッキーが何かをつまみながらお話ししましょう。
お昼ご飯がクッキーなんて夢みたい。

まくしたてると、少女はその「ソファだらけの部屋」に向かって
歩き出した。例え一人でも、その提案を叶えると、そんな強気な背
中を見て、男はようやくふらふらと立ち上がった。少女の背丈の三
倍もあるソファだってあつたはずだ。壊されてもいやだし、少女が
怪我をするのも嫌だった。

思いもかけなかった重労働。だが男は満足そうに笑ってそれをや
り上げた。

そうして少女と男はそのままだらりと眠り込んだ。時々目を覚まし
ては、クッキーの缶に手を伸ばしながら。

M M y s t i c

「それはひどくあやふや」

上質の襷を黒く染めた骨組みと一昔前に流行った、ほとんどが無
地でほんの一箇所だけにだけ申し訳程度に柄が描いてある布。

少女が選んだソファはやっぱりそういったもので、布地部分が少
なくこつこつして痛いだろうにそれでも眠り続けている。

少女が身じろぎすると、布に刺繍された蝶が中途半端に隠れて、
上から覗けばきつと少女に蝶の羽根が生えたように見えるだろう格
好になった。

惜しむらくは男も少女もその一瞬に気付かなかったことだ。
貴重な一瞬は、大きな欠伸とともに掻き消えた。

「誰だって未開の地は恐ろしい」

ようやく二人が満足して目を覚ました時には、日も傾いて空がほんのりと赤く染まり始めていた。

寝すぎちゃったねえ。いつの間にか男がかけてくれたらしい毛布をたたみながら、少女は笑った。

こんなにだらだらと眠ったのは久しぶりだ。男も満足げに起き上がった。

しかしよく眠っていたな。男は少女を、少女は男を見て思う。やっぱり緊張させてしまったんだろうか。言葉には出さないまでも、二人はお互いを見て、思う。そういえば昨夜は随分と気を使わせてしまった。自分のせいでよく眠れなかったのかもしれない。

男は、少し寒くなつたね、と自分の上着を少女に着せかけると、ソファは僕が片付けておくから、先に中に入っておいで、と促がした。

少女はその言葉に従って家の中に入っていた。男は安堵からであろう、小さな息をついた。出会ったばかりの、何も知らない。そのことを思い出すと、今まで少女に対して取ってきた行動がやけに調子付いたものだったように感じた。

少女もまた、独りになって、小さな手で胸を押さえた。まだ一日目。一日目なのになんて態度を取ってしまったのだろうか。我儘な子供だと思われていやしないだろうか。放り出す権利は向こうにある。ここに置いてください、なんて言う権利は自分にはない。そのことに、初めて気付いた。

どうしたらいいんだろう。困り果てて、二人は家の内と外とで、大きく大きく溜め息を吐いた。お互いに、こんな状況に出会うのは、生まれて初めてだった。

O t h e r

「どれだけ信じあっても人は一つにはなれない」

男はソファを片付け終わると、どうしたものかと少し自室にこもった。少女は食卓に姿を現さない男のことを思って、溜め息をついた。

今さらだ。

けれど一つ間違えたなら。

それでも。

今までの時間を否定はしない。

けれど？

今自分は独りで。

そして。

昨日出会うまでも独りで。

それに……

相手とは年も性別も生まれた場所も違う。

だからこそ

……もつと知りたいと願ったんじゃないかったか？

二人は何事もなかったかのように、仲良く夕食の準備を始めた。男の目から見える少女は、朝見た通り男を興味深そうに見ている、好奇心旺盛でそれでいて少しだけ同じ年頃の子供より口達者な少女で、少女から見える男は、少女を初めて見る生き物のように優しく、けれど観察対象として扱っているような、少し頼りなげな笑顔をする男だった。

P l a c e

「この世界に二つとない、大事な」

二人で夕食を作ると、ひどく手間取って普段の二倍の時間がかかった。男は面倒がつて芋の皮を分厚く、その上完璧に剥かないまま鍋に放り込もうとするし、少女は初めて見る調理器具に慣れず悪戦苦闘するしで、お互いに注意し合い、けれども、笑い合いながらの調理となった。

シチューに入れるはずだった芋はポテトマッシャーに興味を持った少女のおかげでマッシュポテトに変化した。マッシュポテトに使ったためにバターと牛乳が足りなくなつて、シチューはメニユーから消えて、といった具合に男の計画はことごとく少女によつて潰されてしまったが、それでも怒りはせずむしろ楽しそうに見えた。

時間はかかったものの夕食はどうにかテーブルに並んだ。

二人は朝食の時よりも多くの言葉を交わした。そのせいで少しばかりマナーの悪い食べ方になっていたとしても、誰も咎める者はいなかった。

何より二人ともが満足げにしていたので構いはしない。

Q u a r t e r

「完全なものだけが素晴らしいと誰が決めた？」

夕食を食べ終えて外に出た二人が見たのは、細く尖った月だった。満月も綺麗だけれど、三日月の方がわたし好きよ。少女は繋いだ男の手をぶらぶらと揺すりながら言った。

どうして？ 男が発する言葉は、どうして、が多くなった。少女のことを知りたいという思いがそこに込められていた。

そうね、完璧にまんまるだと、なんだか太陽に負けてしまいそうじゃない？ あっちの方があつたかいし、強いし。変化するからこ

そ月は太陽と張り合っていていられると思うのよ。

そういう考え方もあるのか。男はそれを聞いて、少し意地悪なことを思いついた。この少女はきつと月は太陽に照らされているからこそ輝くことができるのだと知らない。太陽がなければ月は輝くことができない。張り合うどころか太陽と月とは平等でもなんでもないんだと、そう告げてみたらどうだろう。

それにしてもどうして月は丸くなったり細くなったりするのかしら？ 少女の問いに、男は答えた。それはね、地球が太陽の周りを公転しているからで月は地球の衛星であって云々。

少女は首を傾げた。

であるから月ってというのは太陽と同じように空にはあるけれど地球から見れば距離はとても近くて太陽はずっとずっと長い時間をかけなくちゃ行けなくてそれから云々。

よくわかんないわ。

少女は男の言葉を遮って、言った。

まとめると。

少女は得意げな表情で男を見上げた。

それでもなんでもお日さまも月も綺麗だから別にいいよねってことでしょう？

男は微笑んで頷いて、心の中で、負けました、と呟いた。

R R a m b l e

「最も愛すべき時間と行為」

ついでだから外を散歩してくるかい？ 男の提案に少女はすぐに頷いた。

夜露に濡れると悪いし、草の汁がその服を汚すといけないからね。男が貸したただばの上着とズボンを、少女は必死にまくりあげた。服からは、クロゼットの埃っぽい匂いと、表現し難い、例えるなら、

新品の本を開いた瞬間のような、そんなかすかな香りがした。それは紛れもなく少女にとって世界で一番好ましい、隣に歩く男の匂いだった。

虫の声がおかしな二人を森の中へと招き、ふくろうがそれを拒んだ。

おうるる、ほうおう、おうるる、ほうおう。

ゴー・ホーム……おうちへお帰り……。ゴー・ホーム……夜まで遊んでいると、決まってこの声がして、捕まって。そしてお尻をこっぴどくひっぱたかれた。チョコレートを一かけ口の中に入れるのも忘れずに。

少女は男をちらりと盗み見た。男は視線に気付くと、疲れた？と尋ねて来た。夜に一緒に出歩いてくれる人は初めてだ。みんな嫌がってたのに。

大きく首を横に振って、少女は、もっともつと先に行ってみましよう、と言った。小さなカンテラに照らされて、足元はふわふわとそこだけ切り取られたように光って浮かび上がる。

ゴー・ホーム。

……嫌だよ。

ぺろり、と舌を出すと、がさがたとふくろうが飛び立つ音が聞こえた。

あ。

勝った。

少女はそれが嬉しくて、男の腕にしがみついた。男は少女が唐突なその羽音に怯えたのかと思い、少女の頭を優しく撫でた。

暗闇もふくろうも森も。ふわふわと頼りない明かりも。

何故か少女には、愛しくてならないもののような、そんな風に思えた。

光る足元に合わせて、少女は小さくステップを踏んだ。可愛らしい声で、歌を歌いながら。

S Song

「それに意味を求めるのは最も愚かな行為」

デジイ・スウィディ	おませな帽子
イロウル・アロウル	いじわるりんご
シェンナ・ミエンナ	おしゃまなジャムびん瓶
ルータス・ロータス	ごちゃまぜてばい！

デジイ・スウィディ	小指の先に
イロウル・アロウル	お砂糖ひと壺
シェンナ・ミエンナ	素敵なまじない
ルータス・ロータス	ごちゃまぜて決めた？

サロリア・リンリア	飛んでけ飛んでけ
サロリア・リンリア	飛んでけチョコレート！
アロエラ・ナルエラ	おいでおいでよつといで
アロエラ・ナルエラ	素敵なパパママ！

T Tale

「あやふやで意味のなさそうなものほど」

少女が満足して歌を歌い終わると、男は楽しげに、それはなんだい、と訊ねた。少女は、なんでもないのよ、ただのおまじない、と答えた。

聞いたことがない？ 嫌いなものはサロリア・リンリアっていうおばけが吹き飛ばしてくれてね、欲しいものはアロエラ・ナルエラっていう妖精さんが持ってきてくれるの。

男はそれを聞いて、ゆっくりと歌詞を反芻した。

すると、君は素敵なパパとママが欲しかった？

少女はそれを聞いて、激しく首を横に振った。少しだけ、男が悲しそうな目をしているのを見て、必死で言い募った。

欲しいものなんてなかったの。だからみんなが歌っているのを真似たの。チョコレートは飛んでいつて欲しかったの。ほんとよ。でも全然飛んでいかなかったわ。素敵なパパもママも、来なかったし。いらなかったし。

そうか。

男はちよつと無理やり気味に笑った。

チョコレートがすぐになくなるといいね。

男の声に、少女はうつむいて、少しだけ鼻の頭を赤くした。でも、この歌、結構叶うのかもしれない。

誰にも聞かれなかった歌。心の中だけで歌っていた歌。

アロエラ・ナルエラ。

大好きと思える人をください。

U n a l t e r e d

「それは絶対とは言えないけれど」

繋いだ手は離さないまま、二人はするすると森の中へ分け入っていった。

すつと涼しい香りが広がってきた。それと、どことなく甘い香りも混じっている気がする。

こんなに早くここに来ることになるとは思わなかったなあ。

男は感心したようにひとりごちた。少女はその言葉の意味がよくわからず、きよときよと男と自分の足元とを見た。

僕は素敵なパパでも、ましてやママでもないけど、チョコレートをこの世界から全部吹き飛ばすこともできないけれどね。

男は歩みを進めながら言う。

君と一緒に楽しく過ごしていききたいなって、今日一日を過ごして思っただよ。

少女は、それはわたしのセリフだわ、と思いながらも、口をつぐんでそれを静かに聞いていた。

本当はね、ここは秘密にしておきたかったんだ。だから、君が秘密をずつと守れる子かどうか、調べるつもりだったんだけど、うん、大丈夫だ。きつと、大丈夫だ。

独り言のような男の言葉に焦れて、少女は、一体なんなの？ と少し怒ったような口調で訊ねた。

ほら。そんなに怒らないで。着いたよ。

男は言うつと、暗闇の中にカンテラから移した小さな火種を暗闇の中に放り込んだ。

次の瞬間、ふわり、と炎が揺れて、消えた。かと思うと、炎のような青く白く赤く黄色に緑に紫にゼリービーンズみたくキャンディみたく様々な色で発光するものが大きく、小さく揺らめいて、上へ下へと移動し始める。

それはくると舞い踊って、揺れた。よく見ればずっと下に猫の爪に似た黄色い切れ目が……さっき見上げた三日月が見える。

湖だ。少女が理解するまでに舞う光は増えて、湖面に揺らめいて、静かに騒ぎ立っていた。

炎に反応する虫なんだよ。なんでこんな色で光るのか、どうしてここにいいのか、誰も知らない。だってこの虫がここにいるのを知っているのは僕だけだからね。

呆けて言葉を無くす少女に、ゆっくりと男が語りかける。

ここだけは僕だけのものにしかかったんだ。誰にも何も言わなければここは変わらず綺麗なままだから。でも、よくわからないけれど、君に教えたい気がしたんだ。

少女は夢を見ているような心地でこくこくと頷き続ける。

秘密。二人だけの。

二人だけの。少女は目に映る極彩色の光を追いながら、そつと男

の手を強く握った。男も強く握り返した。
承諾。言葉はもう必要なかった。

V View

「時に、フィルター、と呼ばれることも」

行きよりもさらに頼りない足取りで歩く少女の手をしっかりと握って、男は歩調をさらにゆっくりと緩めて歩いた。

初めて教えた秘密の場所はいつもとより綺麗に見えた。楽しげに見えた。迎えてくれるように見えた。

一緒にその光景を見た少女はまだぼうっとしている。どうだった、と訊ねたい気もしたが、言葉にしまっでは今の昂揚した気分も一緒に消えてしまいそうな気がした。

今日はすごくよく眠れそうだね。

あんなにたくさん昼寝したのに、すごくいい夢を見られそうだよ。こんなに楽しい一日を過ごしたのは初めてだ。

それもこれもきつとみんな君のおかげ。

君に会えてよかった。

明日も、明後日もずっとずっと。

楽しく過ごそう。

男の目には、そんな未来の光景がまざまざと、まるで手に取ることができるくらいはつきりと映っていた。

W World

「閉じこもってしまうよりも創り出す方がいい」

家から零れる明かりが二人を迎えた。中では誰も待つてはいないと二人とも知ってはいたが、二人にとって、真実に「ただいま」と

言える場所がそこにあった。

ただいま、お帰り、をお互いに言い合つと、二人は柔らかに笑い合つた。

ただいまを言える場所こそが安らげる場所なのだと、二人は初めて知つた。

世界にたつた一つ。

二人だけしか知り得ない世界。

それがなんとも心地のよいものに感じた。

X X a n a d u

「案外と近くにあるが気付きづらい」

それじゃあおやすみなさい。

寝巻きに着替えた少女は、幸せそうにベッドの中に潜りこんだ。

ああ、良い夢を見られるといいね。

男は答えて、またソファに寝そべつた。

沈黙が暗い部屋の中に落ちた。

ねえ。

少女がベッドの中で身じろぎする。

ねえ、もう眠っちゃった？

いいや、まだ眠っていないよ。男はすぐに答えた。

ねえ、明日はこの掃除をしましょうね。それからまた一緒にごはんを作りましょう。いっぱい、いっぱい、やりたいことがあるの。うん。僕も君にたくさん見せたいものがある。服も買ってこようか。それともクッキーを買い込んで来なくちゃならないかな。今日食べきってしまったからね。

そうね。いっぱい食べちゃったものね。ちよつとくらい残しておけばよかった。

さあ、もうお休み。明日のことは明日考えよう。

また、沈黙が落ちた。

ねえ。

なんだい。

わたし、もうチョコレート怖くないかもしれない。

なんで？

なんとなく。もう溺れないと思うの。

そうか。それなら、いい。

そして、沈黙。

ねえ。

うん。

そっち行ってもいい？

男は大きく吹き出した。

それじゃあ狭くて痛いじゃないか。

じゃああなたがこつち来てよ。

いいよ。君がいいんなら。

手を繋ぐ。沈黙。

そうして、二人はすくと眠りの中にいざな誘われた。

Y Years

「過ぎるのは早い。過ごすのは遅い」

昔々、少女と男とが森の奥深くで楽しく二人きりでずっと幸せに暮らしていましたとさ。

Z Zipper

「開けっ放しは非常にみっともない」

この二人のお話は、ここでお終い。

了

（後書き）

全然短編ぽくなくてすいません。長かったです。お疲れ様でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5193a/>

Untitled

[物語に記号はらないというただの言い訳]

2010年12月14日17時20分発行